

タイトル	ゲーテ『兄妹』における少女像
著者	北原, 博
引用	北海学園大学学園論集, 135: 41-54
発行日	2008-03-00

# ゲーテ『兄妹』における少女像

北 原 博

## はじめに

『兄妹』*Die Geschwister* は1776年にヴァイマル公国の素人劇場で初演された一幕物の戯曲である。印刷に付されたのは、1787年に刊行された著作集第3巻においてであり、それまでは一般には知られていなかった。公刊後は19世紀に至るまで舞台上で好まれた作品であるが<sup>1</sup>、ゲーテ研究者の評価は高くない。エミール・シュタイガーがシュタイン夫人との関連がなければ面白くもない作品と断定しているように<sup>2</sup>、ゲーテの作品の中では注目されてこなかった作品であり、また、決して多くはない作品解釈の主眼は主に作品の成立事情に向けられてきた。すなわち、作品で言及される亡くなった恋人と同じ名前を持つシャルロッテ・フォン・シュタインとの関係、あるいは兄と妹との愛情が問題になることから、作者の妹のコルネーリアとの関係が研究者の注意をひいてきた。作品の中の兄妹愛には、作者自身の妹への関係の特徴が付与されていることは明白である<sup>3</sup>。また、シュタイン夫人との関係については、夫人との精神的な結びつきにゲーテが与えた説明である魂の転生という思想から読み解かれてきた<sup>4</sup>。

同じく伝記的な関心に基づくものではあるが、ジークリット・ダムによるコルネーリアの評伝では、コルネーリアの側からの『兄妹』受容が再構成されている<sup>5</sup>。ダムによれば、この作品はゲーテが妹にかくあるように望んでいた願望像を率直に表現したものであり、妹への厳しい断罪であった<sup>6</sup>。ゲーテ兄妹の関係には、子供時代の無邪気な親密さ、そして思春期の性的な欲望と近親相姦タブーによる距離が認められる<sup>7</sup>。また、大学に行くために実家を離れたゲーテにとって、妹は教育対象でもあった<sup>8</sup>。兄妹の禁じられた接近を助けたのが、妹を教育すること、教育的なエロスである。エルケ・リースは、ヨーロッパ文化史の底流をなすプラトンの『饗宴』や『パイロス』で問題になった教育的なエロスをゲーテの生や作品に読み込んでおり、ゲーテ兄妹のエロスおよび劇『兄妹』にもその記号システムを見出している<sup>9</sup>。それは接近を求めつつ距離を保たねばならない関係である。

他方、こうした伝記的な関心に対して、エックハルト・マイヤー＝クレントラー<sup>10</sup>は距離を置く。彼は啓蒙主義道徳や同時代の法律上の議論から『兄妹』における近親相姦モチーフを検討することで、ゲーテが、この問題の道徳的な面のみならず法律的な知識にも精通しており、登場人物

の刑法上の訴追可能性を巧みに回避しながら、劇作品を通して具体的な事件を提示することによって、同時代の道徳・法意識の現実とのずれを問題にしていることを浮き彫りにする。したがって、シュタイン夫人やコルネーリアとの関係といった伝記的な関心からこの作品を切り離し、社会史的・精神的な位置づけを与えている。

もちろん、ゲーテの他の作品との位置関係も研究されてきた。『兄妹』は、ゲーテの劇作品の中では古典劇に至る発展段階とみなされている<sup>11</sup>。市民的な親密さの視点から、『タウリスのイフィゲーニエ』*Iphigenie auf Tauris* (1787) で展開される自律的な道徳的責任という問題圏を先取りしていると解釈されるのである<sup>12</sup>。また、登場人物について比較の対象とされるのはマリアンネと『若きヴェルテルの悩み』*Die Leiden des jungen Werthers* (1774) のロッテ、あるいはヴィルヘルムとヴェルテルであり、ケットナーはマリアンネに「子供のロッテ」という位置付けを与えている<sup>13</sup>。

こうした先行研究の成果を踏まえ、本論では『兄妹』に現れた少女像を明らかにしたい。したがって、分析の中心は作品におけるマリアンネの描かれ方であり、『ヴェルテル』のロッテとの比較は本論の分析に大いに示唆を与えよう。一方で、伝記的な関心に基づく登場人物のモデル探しは本論の目的ではない。とはいえ、作品の伝記的な背景から浮かび上がってくる作者の思想や欲望は、ゲーテの少女イメージの一端を解明しようとする本論にとっても無視できない。こうした先行研究の多様な視点を助けに、本論では、マリアンネには、結婚を控える少女として、将来の夫とともに構成する家族の中での母としての、主婦としての役割を喜んで引き受けて男性を補完するという当時の女性観が内面化されているのと同時に、彼女の世界が自分の世界の枠内に収まるように育てたいという、ヴィルヘルムによる教育の欲望の成果が見て取れるということを明らかにしたい。そのために本論では、まずは準備作業としてエロスにおける教育作用をシャルロッテとの関わりで検討する。続いて、転生思想を通してシャルロッテからマリアンネへのエロスの移行を確認する。そこで一旦ヴィルヘルムとマリアンネとの関係を当時の法学的・道徳的な議論から捉え直したうえで、マリアンネという少女に付与された具体的なイメージを明らかにするという作業を行う。

なお、本論の考察の対象は少女像であるが、「少女」という言葉を、性的に成熟しつつも結婚していない女性と捉えている。男性の場合には、後にも言及するように、自立と結婚が結びつき、青年時代は自立のための修養と試練の段階である。本論は、こうした男性の修業時代に対応する、女性が一人前になる過程として措定されているものが、それが社会規範を再生産するものであれ、規範意識のずれを紡ぎだしているものであれ、文学作品の中でどのように描かれているのか、そのイメージを浮き彫りにする研究の一環でもある<sup>14</sup>。

## 作品の梗概

まずは作品の梗概を示しておこう。登場人物は、ヴィルヘルム、その妹マリアンネ、一家の友

人であるファブリス、そして郵便配達である。なお、作品では台詞はないもののヴィルヘルムのかつての恋人シャルロッテ、近所の子供クリステルの名前が言及される。

作品は主人公ヴィルヘルムの独白で始まる。彼は商人で、利益は少なくとも堅実な商売に満足している。郵便配達が登場して一時独白が中断するが、届けられた金貨をきっかけに、ヴィルヘルムは友人ファブリスに負債があるが、返済のめどがたったことが明らかになる。また、以前彼が放蕩をして財産を浪費してしまったこと、妹マリアンネが実は本当の妹ではないこと、彼女に対して兄妹愛とは別の感情を抱いていることが明かされる。マリアンネが登場して独白が途絶するが、彼女の退場後に続く独白では、マリアンネは死んだ恋人シャルロッテの娘であることが語られる。

そこに友人ファブリスが登場する。ヴィルヘルムは負債の返済を申し出、シャルロッテの思い出に話を移す。ファブリスとの対話から観客に提示されるのは、シャルロッテが未亡人だったこと、ヴィルヘルムは自分の放蕩のために求婚できなかったこと、彼女のために怠惰な生活を脱して働いたが、彼女は亡くなってしまったことである。彼が友人にシャルロッテの娘がマリアンネであることを話してしまおうかと迷っているところに近所の子供を連れてきたマリアンネが登場し、話題は子供の話になる。ヴィルヘルムとファブリスの傍白から、それぞれがマリアンネを妻にしたいという願望を抱いていることが明かされる。

ヴィルヘルムは散歩に出て退場、ファブリスは一度退場して戻ってきたマリアンネとの対話で結婚を話題にするが、彼女は兄から離れられないと告げる。ファブリスはそれでも彼女に求婚し、動転したマリアンネからヴィルヘルムと話すように求められる。彼は受諾の返事と勘違いし、散歩から帰ってきたヴィルヘルムにマリアンネとの結婚を申し入れ、すでに彼女の同意を得た旨を告げる。それを聞いたヴィルヘルムは激昂し、真実を明かしたうえで、ファブリスとマリアンネをののしる。ファブリスは立ち去る。

続いてマリアンネが登場し、ファブリスに求婚され、承諾したと勘違いされたけれども結婚できないことを告げ、ヴィルヘルムだけを愛していることを告白する。彼女が思いのたけを打ち明けたところに、ファブリスが戻ってくる。そして、マリアンネにまだ真実が明かされていないことを知ると、二人の仲を祝福する。戸惑うマリアンネにヴィルヘルムが真実を告げ、二人は結ばれ、幕となる。

## 教育的エロス

本論の関心である少女の分析に取り掛かる前に、まずは少女の母親シャルロッテとヴィルヘルムとの恋愛の分析から始めたい。

ヴィルヘルムにとっては、放蕩を脱して堅実な市民生活に適合するように社会化されるきっかけとなったシャルロッテとの恋愛は精神的なものである<sup>15</sup>。もちろん彼らの関係が性愛に発展する可能性がなかったわけではない。しかし、当時の市民道徳を代表するヴィルヘルム<sup>16</sup>にとって、

それは結婚という制度化された結びつきでなくてはならなかった。彼の内では自らの感情の欲するところと現実是对立し続けるものではない。しかし、ヴィルヘルムの側には結婚を申し込む要件が整っていなかった。それは彼自身がはっきりと述べているように、財産が無い、つまり経済的に自立できていないためだった。結婚に財産が必要であることは、デュルメンも指摘している。男性が結婚するためには、「必要な年齢に達しており、小さな農場とか商売とかを切り盛りすることが許されているか、公職につくかして、要するに自分の所帯を構えられるだけの経済的な基盤が整っているのだからなければならない」<sup>17</sup>のである。そのため、結婚年齢の平均値が一般的な結婚年齢を表すわけではないことに注意しなくてはならない。結婚のための経済的条件を得られる年齢は千差万別であったから、年齢差のある結婚も珍しくはなかったのである<sup>18</sup>。作品が描き出している都市の市民層に関する例として、ゲーテの周囲の女性を一瞥してみても、母親のカタリーナ・エリーザベトは16歳の時に38歳のヨーハン・カスパール・ゲーテと結婚しているし、妹のコレネリアは22歳のときに11歳年上のシュロッサーと結婚している。作品では明示されていないものの、ヴィルヘルムとマリアンネの兄妹もまた年齢差のあるカップルであり<sup>19</sup>、ヴィルヘルム自身作品の時点ではもはや青年とは言えない<sup>20</sup>。

今ヴィルヘルムには結婚による結びつきが妨げられている。『若きヴェルテルの悩み』の主人公は、状況が異なるとはいえ、社会制度に適合できない自分の欲望をただ消費して破滅していったが、ヴィルヘルムは自らを現実を組み込んで、感情の要求を満たすように現実における自分を変革することができるし、実際に彼は行動に移しているのである。それは現実に対する妥協ではなく、時代の意識の進歩である<sup>21</sup>。

それから振り返ってみて、父の財産を私が浪費してしまったのを見たときの苦しみといったら名状しがたい。結婚を申し込むことは許されなかったし、彼女の置かれていた状態をそう悪くないものにしてあげることができなかつた。私ははじめて必要なだけの適当な生計を得たい、日々ドラドラと悲惨に過ごしてきたその怠惰な状態から身をもぎ離さなければと感じたのだ。私は働いた——でもそれが何だったというのだ——私は続けた、一年間困難をやり遂げた。ついにかすかな希望が訪れた。見る見るうちに僅かばかりの財産が増えていった——そして彼女は亡くなったのだ——居た堪れなかつた。(FA I 5, 14)

現実の秩序に阻まれることによって、ヴィルヘルムは自分の意識を改める。シャルロッテは直接ヴィルヘルムを教育して社会化を手助けしたわけではないし、彼の意識を変えること、つまり教育することに、彼との恋愛の喜びを感じていたわけではないにせよ、彼女の存在自体が彼の人生の導き手となっている。ヴィルヘルムは「彼女を通して全く別の人間になった」(FA I 5, 14)のだと意識している。ここには恋愛を通して年上の女性が未熟な男性を育てるという中世騎士社会のミンネと似通った教育的エロスの構図を読み取ることは出来ないだろうか。しばしばヴィルヘ

ルムとシャルロッテとの関係に読み込まれるゲーテとシュタイン夫人との関係には、ヴァイマル宮廷の新参者で市民階級の出であるゲーテを、年長の貴族であるシュタイン夫人が貴族・宮廷生活圏に組み入れようとする努力が認められ、エロスは精神的に昇華された姉弟愛へと形を変えられている<sup>22</sup>。これと似たような作用がヴィルヘルムとシャルロッテの間にも認められるのである。ただし、彼らの場合、制度化されないがゆえに保たれる一定の距離を姉弟愛に転化するのではなく、制度への適合による距離の解消を目指すのであるが。

自らの労働によって得た多少の財産によって、愛により教育される者を脱して社会制度に合致したエロスを満たすことのできる夫婦関係へと転換する希望が出てきたところで、シャルロッテの死のためにこの愛の形態の変更は断念せざるをえなくなる。しかし、その代りに血縁関係を捏造することで、「妻」不在のもとでの「娘」の養育という教育のエロスを享受することになる。一人前の男性になるためにシャルロッテによって導かれていた彼が、今度はエロスの主体に転換する。そして、今や作品冒頭で彼自身の口を通して語られるように、市民社会の中での地味ではあるが確固たる地位を築くことで結婚可能な男性として成熟したヴィルヘルムは、こちらもまた性的に成熟して結婚可能となっているマリアンネに対する教育のエロスから、保たねばならない距離を制度に合致した形で取り除こうとするのである。

### シャルロッテの転生としてのマリアンネ

次にシャルロッテとの関係がどのようにマリアンネとの関係に転化するのかを検討してみよう。「兄」のヴィルヘルムにとって、マリアンネはあくまでも亡くなった恋人シャルロッテとの関係において捉えられている。

シャルロッテ、あなたがこの世の去り際にあなたの娘を私に委ねてくれたということほど、あなたは、あなたへの私の愛に対して光栄かつ神聖に報いることはできなかつたのだよ！ あなたは必要としていたものすべて与えてくれ、私を生に結び付けてくれたんだ！ 私はあなたの子供として彼女を愛した——そして今では！——まだ私には錯覚のようだ。あなたに再び会っているように思えるんだ、私のために運命があなたを若返らせて返してくれたと、今ではあなたとひとつになって暮らせると思えるんだ。人生の最初の夢ではできなかつたことが！ してはいけなかつたことが！（FA I 5, 13）

ここでマリアンネはヴィルヘルムにとって若返ったシャルロッテである。シャルロッテの存命中に果たせなかつた結婚を、ヴィルヘルムは「妹」と果たすことを夢想する。このことは一見、彼にとってマリアンネが失った恋人を血縁関係によって代替するものにすぎないということを示しているように思われる。シャルロッテを失おうとしていたとき、彼をこの世に結びつけていたのは、恋人との関係を恋人の死後も継続できる娘の存在である。

マリアンネがシャルロッテの娘であり、その養育を引き受けることは、語られることのないシャルロッテの夫の位置、マリアンネの父親の位置を占めることになる。心理分析の立場からこの作品を分析しているアイスラーは、マリアンネが自分の娘であるというヴィルヘルムの無意識の幻想を推測している<sup>23</sup>。しかし、ヴィルヘルムはマリアンネを養女として養育するのではなく、妹として捏造した血縁関係に組み込むことで、手元に置いて養育するのである。なぜ、ヴィルヘルムは社会に対してマリアンネの父親であると主張しなかったのだろうか。ケットナーは、シャルロッテの娘を妹とした理由を、未婚男性の家でこのような子供を養育する際に世間の目を引いたり不快なことが生じたりするのを避けるための設定であると推測している<sup>24</sup>。

マリアンネはいつまでも子供ではない。ヴィルヘルムは亡くなった恋人の子供を育てたつもりであっても、そこには性的に成熟し、最も親密な関係にある「兄」に異性を発見し、読書によって恋愛のイメージを強化されていく少女が姿を現す。さらにヴィルヘルムは徐々に大人になっていくマリアンネの姿に若返ったシャルロッテの姿を認める。それはシャルロッテとマリアンネが親子であるがゆえの類似ではない。彼にとってマリアンネはシャルロッテと同一化している。だが、こうしたヴィルヘルムの同一視は幻想ではないのだろうか。

この同一視の背景には、ゲーテ自身の確信があると考えられている。それは1776年4月14日付のシュタイン夫人に宛てられた「なぜおまえは私たちに深いまなざしを与えたのか」(Warum gabst du uns die tiefen Blicke) で始まる詩に込められた転生の思想である<sup>25</sup>。

運命は私たちに何を準備しようというのか  
 運命は私たちをどうしてかくもぴたりと結びつけたのか  
 ああ、あなたは過ぎし時代に  
 私の姉妹あるいは妻だったのだ (V. 25-28)

既婚女性であるシュタイン夫人とは現世では決して結ばれることはないが、あまりにも深い精神的な結びつきを感じたゲーテは、二人の関係に運命を見て取る。また、ゲーテはヴィーラントに宛てて「この女性が私に及ぼす影響を輪廻 (Seelenwanderung) によるものという以外には説明できません——そうですとも、私たちはかつて夫であり、妻であったのです」<sup>26</sup>と書き送っている。運命の結びつきを根拠づけるのが前世である。二人は前世において兄弟か夫婦という親密な関係であった。妹はゲーテにとって「最も親密に結びついていた」<sup>27</sup>存在であったし、シュタイン夫人との関係も姉弟愛のようなものであり、姉妹はゲーテにとって極めて親密なイメージなのである。と同時に、姉妹とはもちろん距離を置かなければならない存在である。ヴィーラント宛の手紙に表出されているように、ゲーテの願望は、シュタイン夫人の前世を心身ともに結びつくことが可能な「妻」とすることだっただろう。しかし、自分たちが置かれている社会秩序では、「妻」と断定することがはばかられ、「あるいは妻」と控えめに表現しなくてはならず、距離のある最も親密

なイメージである姉妹が前面に出てくるのであろう。前世における最も親密な関係の記憶が離れ離れになっている二人の魂に残っている。ために現世において出会った失われた半身同士は強力に惹かれあうことになる。それが魂の輪廻が及ぼす説明のつかない影響力となる。

戯曲『兄妹』に話を戻そう。未だ心を捉えて離さない魂の結びつきの記憶を持つ主人公ヴィルヘルムの前に、亡くなった恋人の姿が肉体を伴って現れる。彼がそこに失われた半身の転生を認めるのは容易である。彼はシャルロッテの手紙を手にして魂の結びつきの記憶の世界に浮遊したとき、ファブリスに思わず転生の秘密を漏らしてしまう。

彼女が書いた文字を見、彼女の手が触れた紙を見ると、彼女はまだそこにいると思うのだ——  
彼女はそこにいるんだ。(FA I 5, 14)。

手紙が喚起する亡き恋人の記憶、そしてすぐそばにいる娘のイメージがヴィルヘルムの中で渾然一体となる。かくしてヴィルヘルムは、ゲーテが抱く魂の輪廻の確信を共有していることをも漏らしてしまう。この確信ゆえに彼にとってマリアンネと結ばれることは自明である。この確信があるからこそ、ヴィルヘルムはマリアンネの魂の内にある記憶がヴィルヘルムを強く求めるはずだと信じている。だからこそ、ヴィルヘルムは積極的にマリアンネを獲得しようとすることなく、彼女の彼に対する愛情が、兄妹愛から恋人への愛、夫婦愛へと自ずと変化するのを待ち続けることができるのである。

### マリアンネに対するヴィルヘルムの距離

ヴィルヘルムはもちろん兄妹関係が作り上げられたものであることは承知しているので、彼女との親密さを利用して、彼女の愛情を、兄妹愛を超えた愛情へとひそかに逸脱させることも可能であっただろう。あるいは、兄妹関係を解消して、恋人として名乗を上げることもありえたであろう。しかし、彼は自らの欲望を抑圧して、厳格に兄の立場を道徳的に守り続ける。さらにマリアンネとシャルロッテとの同一性に基づくマリアンネと自分との結びつきが運命によって定められているという確信を抱きつつも、自分が作り出した虚構の兄妹関係は自分の感情によって解消するのではなく、マリアンネの側からの兄妹愛を超えた夫婦愛への欲求を確認するまでは解消しようとしなない。ある意味ではマリアンネの感情を優先した態度であるといえよう。しかし、そこには兄の側の責任回避の姿勢を読み取ることも可能である<sup>28</sup>。

マリアンネの意志の尊重は、ファブリスの結婚申し込みを受ける際にも、ヴィルヘルムにとっては大事な要素となっている。マリアンネの同意は、ファブリスとの結婚を妨げる根拠の喪失である。自分にとってそれがどんなに大きな喪失であったとしても、親友の幸福を喜ばなければならない。それが時代の道徳的な感傷主義の慣習であり<sup>29</sup>、ヴィルヘルムは道徳的に正しく振舞うために苦しむのである。ファブリスの申し入れに対して戸惑い、返答を回避しようとしていたヴィ



ルヘルムを絶望に突き落とすのは、マリアンネの結婚への同意——これはファブリスの勘違いであるのだが——であった。それは魂の転生によって再び手に入れたかに思われたシャルロッテ＝マリアンネの裏切りを意味する。

一方、当時の法解釈の議論から判断すると、兄の側の責任回避には一定の作劇上の制限も関係していることが明らかになる。マイヤー＝クレントラーはこの作品にゲーテの法律知識への習熟を認め、兄妹の結婚というハッピーエンドに至るために、登場人物の振る舞いが周到に考慮されていることを解明しているのであるが、それによれば、兄妹が本当の義理の兄妹であったとしても、マリアンネの側からの兄妹愛の逸脱は法解釈上、訴追の対象とはならないのである<sup>30</sup>。そもそも当時の近親相姦概念は現代のわれわれのものとは異なっている。近親相姦の禁止の理由としては生物学的・遺伝的理由は知られておらず、問題とはなっていない。近親相姦の線引きは慣習に基づくものであり、当時は血族のみならず姻族との間の婚姻も問題となっていたのである<sup>31</sup>。つまり、血の繋がりがあろうか否かということは決定的な要因ではなかったのである。それよりも近親結婚で問題となるのは親戚関係が本来のものであるのか、それとも「作られたもの」(例えば養子縁組による親戚関係)であるのかということである。「作られた親戚関係」の間の婚姻は、自然法には抵触しないが、市民法にのみ抵触する。そして市民法の知識は法的能力に欠ける女性には求められないものであり、それゆえに女性が罪に問われることはなかった<sup>32</sup>。

しかも、劇の観客には、そもそも作品の冒頭で二人が兄妹ではないことが知らされており、近親婚にはなりえない、それゆえに一見近親相姦を犯しそうな兄妹は、何らかのきっかけで恋人同士に転化することが自明の筋書きになっている。しかし、それだけでは十分ではない。ヴィルヘルムの側の自制もまた、つまり、いついかなる時も家族としての近さを近親相姦に利用しないということが、刑法上重要なのだという<sup>33</sup>。自ら兄妹愛を逸脱しないように自制する、それどころかヴィルヘルムは無理に妹との間に距離を置いている。

マリアンネ [...] さあもう一度キスして。

ヴィルヘルム ハトがうまく焼けたら、デザートにあげよう。

マリアンネ 兄弟って不躰だから忌々しいわ。ファブリスさんだとか、そうでなくてもちゃんとした青年ならば、キスしてもいいってことになれば、壁の高さまで飛びあがるでしょうに、こちらの殿方ときたら、私が差し上げようというキスをお断りになるのね。——じゃあハトを焦がしてしましましょう。(去る)

ヴィルヘルム 天使よ！ 愛おいしい天使よ！ 私は自制するのだ、あの子に抱きついてすべてを打ち明けたりはしないのだ。[...] (FA I 5, 12)

妹との対話とその直後の独白の落差に、ヴィルヘルムの願望と自制との相克が浮き彫りになっている。ヴィルヘルムの自制は彼女に対する冷たさと感じさせる態度となって表れていた。しかし、

それが上辺にすぎないことも彼女は気付いている。なぜ兄が無理に距離を置こうとしているのか、その理由は知らないけれども。「兄が生真面目なふりをしたり、怒っているように見せかけたりするのを、私、時々こっそりと笑っているの」（FA I 5, 18）と語っているように、マリアンネはそれを微笑ましく眺めているのである。

このようにヴィルヘルムは厳格に超えてはならない距離を保ち続けていたのであるが、彼はそれに完全に成功しているのだろうか。そもそもヴィルヘルムはマリアンネを世間から隠してきたのである。これはマリアンネとの結婚を申し込む友人ファブリスに対して激昂したヴィルヘルムの台詞からも明らかである。彼はマリアンネの愛情が兄妹愛を逸脱するのを待って、来るべき結婚の障害となりかねない親密さの乱用を避けるために無理に距離をとりながらも、保護者としての権力でもって、彼女の愛情が誤った方向に向かわないように、競争相手を未然に排除してきたのである。

### ロッテとマリアンネ

本論ではこれまで『兄妹』における男女関係の特徴を浮き彫りにしてきたわけであるが、ここではエロスの対象となる少女マリアンネのイメージを考察することにしよう。

ヴィルヘルムが亡くなった恋人シャルロッテの魂の転生と認めるマリアンネとはどのような人物なのだろうか。ヴィルヘルムの視点からは、彼女の人物についての具体的な描写を読み取ることはできない。彼がマリアンネについて語る表現は、「天使！ 愛らしい天使！」（FA I 5, 12）だとか「私の唯一のもの — 私のすべて」（FA I 5, 23）、「私の希望の最後のもの、私が気にかけている最高のもの」（FA I 5, 24）といった具合であり、マリアンネへの恋愛の情熱にすべてを捧げていることを表明しているにすぎない。他方、ヴィルヘルムがマリアンネに生き写しを認めるシャルロッテについても、「最も素晴らしい人の一人」、「実に純粹で偉大」（FA I 5, 13）、「この地上には彼女はもったいない」、「この世を去ろうとしている天使」（FA I 5, 14）と具体性に欠け、ファブリスの「美しい魂だ！」（FA I 5, 14）という言葉に集約されてしまう。魂の無垢、これが恋人の目を通して語られるシャルロッテ＝マリアンネの表象である。ヴィルヘルムの言語表現は本来、決して貧困なものではない。ハンナ・H・マルクスは『兄妹』の中での「言葉」に着目しているが、ファブリスの場合には感情の欠落が言語表現の貧困さを反映しているのに対して、ヴィルヘルムには商人としての遂行的な言語表現から詩的表現に至るまでの言語使用の多様性があることを指摘している<sup>34</sup>。にもかかわらず、恋人のイメージは彼の内面で膨張するのみで、表現される言葉は伝達能力を十分に発揮できない。

それに対して友人のファブリスの場合には、マリアンネのどのような面を求めているのかが明確になっている。しかも、彼は自分の求婚を十分に吟味したうえで決断しているのである。だからこそ彼はヴィルヘルムに対して、「自分に何が欠けているのか、彼女が妻になり、君が義兄弟になれば、私が何を手にすることになるのか、全部説明しようか？」（FA I 5, 22）と言っている。

ことができるのである。彼はマリアンネたちに自分を補完するものを求めている。彼が補完を求めているものは、マリアンネとの対話の中で漏らす感嘆の言葉によって明らかになる。それは近所の子供を母親以上に可愛がる様子を聞いて漏らす「愛らしい性格だ」と、かいがいしく兄に尽くす様子を知って口にする「かわいい主婦だなあ！」(FA I 5, 17)という言葉である。ファブリスは主婦かつ母親の役割を担っている少女の姿に、自分の妻の理想を認めるのである。そして、彼女の愛情がヴィルヘルムに注がれていることを十分に意識しているにもかかわらず、それを肯定して、かいがいしく家政を切り盛りし、子供の養育に喜びを感じる主婦かつ母親の役割を要求するのである。

こうしたマリアンネのイメージには、ゲーテの小説『若きヴェルテルの悩み』のヒロインであるロッテとの類似性が認められる<sup>35</sup>。『ヴェルテル』のロッテは、その登場の場面で、弟妹に囲まれながら夕食のパンを切り与えている<sup>36</sup>。彼女は亡くなった母親から弟妹の世話をゆだねられ、主婦かつ母親の役割を担っていたのである。『兄妹』のマリアンネもまた主婦のような少女であるという性格付けは、登場の場面にすでに表れている。彼女は、ヴィルヘルムが自分の願望世界の中で語っていた独り言を、自分が実際に呼ばれたものと勘違いして登場するのであるが、このとき彼女は夕食の準備のために鳥の羽をむしっていたのである。つまり家事をする少女として観客の前に登場するのである。マリアンネはロッテとは設定を異にするものの、近所の子供に対しては母親の役割を、兄に対しては一家の主婦の役割を主体的に引き受け、そこに喜びを見出している。彼女は言う。

マリアンネ そんなものなのです。——朝目覚めると、兄がもう起きているか耳をそばだてます。静まり返っている。さっさとベッドを抜け出してキッチンへ行き、火をおこす。女中が起きてくるまでには、すっかりお湯が沸いているように、そして兄が目を開けたらすぐにコーヒーを飲めるようにするのです。

ファブリス かわいい主婦だなあ！

[…]

ファブリス 彼は幸せだなあ。

マリアンネ いいえ、私が幸せなの。もし兄がいなければ、私がこの世で何に手をつけたらいいのかもわからなかったでしょうね。私は全部自分のためにしているのに、全部兄のためにしているように思えるの。自分のためにしていることでも、いつも兄のことを考えてしていますから。(FA I 5, 18f.)

マリアンネの場合、引用の後半のように、自らの主婦の役割に喜びを感じるのは、兄のための主婦、つまり妻の地位を占める喜びに由来するという限定はつくものの、その姿はファブリスの求婚の根拠となっている、家庭生活の喜びを語るロッテと同様の<sup>37</sup>、家庭的なものを女性の役割とす

る時代の価値観を内面化した女性なのである。

マリアンネがロッテに似ている点は、こうした、家庭という限定された空間に自分の活動圏を限定し、そこに自足する女性の在り様だけではない。二人の描かれ方には、無意識に性的な成熟が表出するところにも共通点が見出される。ロッテはヴェルテルの前でカナリアにキスをして、ヴェルテルの官能を刺激する<sup>38</sup>。ヴェルテルは抗議する。「彼女はそんなことをすべきではなかった。天上の無垢と浄福の光景でもって僕の想像力を刺激して、僕の心を眠りから覚ますべきではなかった」<sup>39</sup>。彼女自身はそれを実に無邪気にやってのける。しかも、彼女はこの段階ですでにアルベルトと結婚しており、『兄妹』とは違った意味で、ヴェルテルとロッテとの間には越えてはならない一線がある。親密さの中での距離というモチーフが、ヴェルテルの中でも変奏されている。他方、すでに言及したように、『兄妹』のマリアンネもまた、兄妹愛を逸脱しないように過度に自制する兄にキスをねだっている。ヴィルヘルムもまたヴェルテル同様に彼女の前では内に宿る官能の欲求を抑圧しているにもかかわらず、少女の無邪気さはそれを容赦なく刺激するのである。さらにマリアンネはもっと際どい情景をファブリスに語って聞かせる。

マリアンネ […] 時々あのいたずらっ子 [=近所の男の子] は自分で兄の許しを請うて、私の寝室に入るのよ。

ファブリス 煩わしいことはありませんか。

マリアンネ まったくありませんわ。あの子は一日中とても腕白なのよ。それがベッドに私が入ると、まるで子羊みたいなのよ。甘ったれ小僧なの。できるかぎり私を抱きしめるの。ときには全然寝かしつけることができないんだから。

ファブリス (半ば独り言で) 愛らしい人だ。(FA I 5, 16)

ここで登場人物たちは、男の子をベッドに入れる、そして相手に抱きしめられているという事柄の持つ性的なイメージを無視している。しかしながら、観客にとってはこの場面の含意するところは明瞭である<sup>40</sup>。ゲーテはこうした場面を挿入することで、マリアンネを単なる無垢な子供として描き出すのではなく、性的に成熟したセクシャルな存在であることを示唆する。そもそもヴィルヘルムがシャルロッテの転生を認めて妻にしたいという願望を抱いたり、ファブリスが求婚したりするということが、マリアンネの性的成熟を前提としている。子供は婚姻の対象ではないのだ。

それではマリアンネは将来良き主婦や母になる傾向をもった、性的に成熟した少女にすぎないのだろうか。ファブリスにとってはそれで充分だっただろう。しかし、ヴィルヘルムにとっては、それだけの存在に魂の転生を認める必要があるのだろうか。他方、マリアンネが主観的に近親相姦のタブーを犯してまで手放そうとはしなかったヴィルヘルムとの関係とは何だったのだろうか<sup>41</sup>。それは、『ヴェルテル』の主人公たちが感じたような心情の一致であろうか。

ヴィルヘルムはマリアンネを世間から隔離して育てており、彼は彼女の狭い生活圏の中のほとんど唯一の男性であり、彼は彼女の感じ方やものの考え方の全体を縛っている<sup>42</sup>。彼女にとってヴィルヘルムは世界に等しい。

マリアンネ ずっと前からわかっていてもよかったはずよ。兄さんだって知っているじゃない、お母さんが死んでから、子供の時から私がどんなふう成長したのか、いつも兄さんといたってことを。— ねえ、私は兄さんの兄としての配慮以上のものに感謝しているだけではなくて、もっと大きな喜びを兄さんのそばで感じているの。そしてだんだんと兄さんが私の心を、私の頭全部を占めていってしまったので、いまではもう他のものはちょっとの居場所を探すのにも苦勞しているわ。[…] (FA I 5, 26)

初めからファブリスの入り込む余地はなかったのである。ヴィルヘルムの影響下にある均質な世界に暮らすヴィルヘルムとマリアンネとの関係に、異質なものが入り込むことによって生じた事件が戯曲『兄妹』である。異質なものは、自ら作り出した兄妹関係という親密性のファンタジーに絡め取られていたヴィルヘルムとマリアンネとの関係を再編し、性愛を含めた恋人同士の愛、あるいは夫婦愛へと変化させる力にすぎない。彼らの世界がヴィルヘルムの感じ方や考え方に支配されたままであることには変りない。

それまで互いに知らなかった男女が出会い、互いの感じ方、考え方の一致を発見して深く結びついた二人の関係に与えた説明が魂の転生思想であるのならば、ヴィルヘルムとシャルロッテの関係にはそれが認められるかもしれない。しかし、その魂の結びつきは、本当にヴィルヘルムとマリアンネに転生したのかという疑問である。彼らには、異質な世界をさまよって失われた半身を再び見出すことによって生じる強い引力は認められない。むしろそこにあるのは、均質な世界に侵入してきた異質なものを排除する強い反発力である。ヴィルヘルムとマリアンネとの関係は、作られた親密さに支配されている。そしてマリアンネの世界観はヴィルヘルムが享受してきた教育的エロスの作品なのである。

このように考察を進めてくると、マリアンネに込められた少女像には、強い欲望が表現されていることが明らかになる。マリアンネは、当時の社会秩序が求める主婦や母としての役割をただ引き受けるのではなく、自分の願望として主体的に引き受ける。それは規範意識を再生産することにも繋がるが、そこには同時に、現実を障害として捉えるのではなく、秩序を自分の感情の要求に合うように利用する巧みさがある。それはヴィルヘルムにあってヴェルテルにはなかった知恵である。だが、マリアンネに見られる秩序の利用は、一見したところ自分の願望の成就ではあるが、彼女の願望には他者の願望が投影されている。マリアンネは、ヴィルヘルムの恋人であった母親の魂が転生したものとして生きることが求められており、そのように育てられたのである。彼女の生きる世界は、母親の魂との合一を願うヴィルヘルムの願望を完全に充足するようなもの

として作り上げられたフィクションの世界である。このフィクションの中で、マリアンネはそれが自らの欲求であると信じて、母シャルロッテとヴィルヘルムとの美しい魂の交流の物語を演じ続けるのである。

## テキスト

テキストとしては、以下の版を用いる。Johann Wolfgang Goethe: *Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche* (sog. Frankfurter Ausgabe). Hrsg. v. Hendrick Birus u.a. Frankfurt am Main 1987ff. (=FA).

## 註

- 1 Vgl. FA I 5, 917.
- 2 Vgl. Emil Staiger: *Goethe*. Bd. 1. Zürich 1957, S. 527.
- 3 Vgl. FA I 5, 919f.
- 4 Vgl. Robert Hering: *Goethes „Geschwister“*. In: *Jahrbuch des freien Deutschen Hochstifts* (1926), S. 174-202.
- 5 Sigrid Damm: *Cornelia Goethe*. Frankfurt am Main 1988.
- 6 Vgl. Damm, a.a.O., S. 207. ゲーテの本来の執筆動機がいかなるものであったにせよ、送付された原稿は、妹にとっては非難となりえたであろう。
- 7 Vgl. Goethe: *Dichtung und Wahrheit*. 2. Teil. 6. Buch. FA I 14, 251.
- 8 Vgl. Damm, a.a.O., S. 59ff.
- 9 Elke Liebs: *Eros des Unmöglichen oder Die Ontologie des Mangels. Goethe und Platon*. In: Hans-Jörg Knobloch / Helmut Koopmann (Hrsg.): *Goethe*. Würzburg 2007, S. 135-158.
- 10 Eckhardt Meyer-Krentler: *Erdichtete Verwandtschaft. Inzestmotiv, Aufklärungsmoral, Strafrecht in J. W. Goethes „Die Geschwister“*. In: *literatur für leser* 4 (1982), S. 230-249.
- 11 Vgl. z. B. Hanna H. Marks: *Die Geschwister*. In: *Goethes Dramen: Neue Interpretationen*. Hrsg. v. Walter Hinderer. Stuttgart 1980.
- 12 Vgl. Heinrich Clairmont: *Die Geschwister*. In: *Goethe Handbuch. Bd. 2 Dramen*. Hrsg. v. Theo Buck. Sonderausgabe. Stuttgart 2004, S. 152f.
- 13 Vgl. Kettner: *Goethes Drama Die Geschwister. Das Erlebnis und die Dichtung*. In: *Neue Jahrbücher für das klassische Altertum, Geschichte und deutsche Literatur*. Abt. I. 25 (1910), S. 603; Marks, a.a.O., S. 113ff.
- 14 この研究テーマについて筆者は、日本独文学会の2007年秋季研究発表会におけるシンポジウム「18世紀における少女」でゲーテの小説の検討を行っている。本論はこのテーマに接続して、戯曲の場合の検討の端緒としようというものである。なお、シンポジウムの報告書は2008年秋に刊行を予定している。
- 15 もし二人の関係に肉体的なものが含まれていれば、後のゲーテの作品『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』*Wilhelm Meisters Lehrjahre* (1795・96年)でロターリオが陥ったのと同様の倫理的問題が生じていたであろう。ロターリオはテレゼの母親との関係ゆえにテレゼとの結婚を断念していたのである。なお、『修業時代』においても、テレゼとその母親が本当の親子ではない、つまり「作られた親子関係」であることが判明したために、結婚の障壁は取り除かれることになる。
- 16 ヴィルヘルムは作品中できわめて道徳的感傷主義を体現する人物として描かれている。Vgl. Meyer-

- Krentler, a.a.O., S. 231.
- 17 リヒャルト・ファン・デュルメン『近世の文化と日常生活 1』佐藤正樹訳 鳥影社 1993 年, 177-178 頁。
  - 18 デュルメン, 前掲書, 178 頁
  - 19 ケットナーはマリアンネがヴィルヘルムよりおよそ 15 歳若いとしている。Vgl., Kettner, a.a.O., S. 603.
  - 20 ケットナーは, ヴィルヘルムが少なくとも 30 代半ばであるとしている。Vgl. Kettner, a.a.O., S. 599.
  - 21 Vgl. Meyer-Krentler, a.a.O., S. 238f.
  - 22 Vgl. Clairmont, a.a.O., S. 146.
  - 23 Vgl. K. R. Eissler: *Goethe. Eine psychoanalytische Studie 1775-1786*. München 1987, S. 258.
  - 24 Vgl. Kettner, a.a.O., S. 602.
  - 25 Vgl. Hering, a.a.O., S. 179ff.
  - 26 Brief an Wieland vom April 1776 (?). FA II 2, 33.
  - 27 Goethe: *Dichtung und Wahrheit*. 2. Teil. 6. Buch. FA I 14, 250.
  - 28 アイスラーは, 妹との関係において, 近親相姦タブーを破るという最高の愛の証という幻想がゲーテ自身の積極的な関与を否定する結果となっていると指摘している。Vgl. Eissler, a.a.O., S. 259.
  - 29 Vgl. Meyer-Krentler, a.a.O., S. 238.
  - 30 Vgl. ebd., S. 247.
  - 31 Vgl. ebd., S. 242ff.
  - 32 Vgl. ebd., S. 244f.
  - 33 Vgl. ebd., S. 246.
  - 34 Vgl. Marks, a.a.O., S. 114.
  - 35 ロッテとの類似についてはむしろ性格について論じられてきた。ロッテの憂いなき, 天真爛漫な性質がマリアンネにも認められるのである。Vgl. ebd., S. 113f. また, ケットナーは, 明るさや善良さ, 感情の温かさに一致点を認めるが, 真剣な義務の遂行によって得られた性格の完成, 悟性の明晰さ, 意志の強さに欠けている点, そして流行の教養にほとんど触れていない点に差異を認めている。Vgl. Kettner, a.a.O., S. 603.
  - 36 Vgl. Goethe: *Die Leiden des jungen Werthers*. FA I 8, 41.
  - 37 ロッテはヴェルテルと出会った直後に, 家庭生活を「もちろん天国というわけではありませんが, 全体としては言い表すことのできない至福の源泉」(FA I 8, 45) であると語っている。
  - 38 Vgl. FA I 8, 167. なお, これは第 2 版で挿入されたエピソードである。つまり, ロッテ像を明確化するために付け加えられたのである。
  - 39 Ebd.
  - 40 Vgl. Meyer-Krentler, a.a.O., S. 236f.
  - 41 マリアンネは最後までヴィルヘルムとの関係が作り上げられた兄妹関係であることを知らないの  
で, 彼女の愛の告白は, 彼女の意識の中では近親相姦を犯すことに繋がる。通常は越えることができない障壁を越える「兄妹の愛の告白は, 最高の愛の表現」ということになる。これをゲーテが率直に  
称賛していることがこの劇の核となっているとジークリット・ダムはしている。Vgl. Damm, a.a.O.,  
S. 209.
  - 42 Vgl. Kettner, a.a.O., S. 603f.